

2017年度入学試験(2016年8月実施) 問題1

問1 ベクトル演算は、 (x, y, z) 座標上での基本ベクトル(座標軸方向を向く単位ベクトル) i, j, k 間の演算規則がわかっていれば解ける。

$$\mathbf{r} = x\mathbf{i} + y\mathbf{j} + z\mathbf{k}, \quad \nabla = \mathbf{i} \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial}{\partial z}$$

であり、

$$\mathbf{i} \cdot \mathbf{i} = \mathbf{j} \cdot \mathbf{j} = \mathbf{k} \cdot \mathbf{k} = 1, \quad \mathbf{i} \cdot \mathbf{j} = \mathbf{j} \cdot \mathbf{k} = \mathbf{k} \cdot \mathbf{i} = 0$$

$$\mathbf{i} \times \mathbf{i} = \mathbf{j} \times \mathbf{j} = \mathbf{k} \times \mathbf{k} = 0, \quad \mathbf{i} \times \mathbf{j} = -\mathbf{j} \times \mathbf{i} = \mathbf{k}, \quad \mathbf{j} \times \mathbf{k} = -\mathbf{k} \times \mathbf{j} = \mathbf{i}, \quad \mathbf{k} \times \mathbf{i} = -\mathbf{i} \times \mathbf{k} = \mathbf{j}$$

である。(a) は面倒はない。(b),(c) に関しても労力を惜しまないとすれば、

$$\mathbf{a} = a_x\mathbf{i} + a_y\mathbf{j} + a_z\mathbf{k}$$

として、頑張れば、答えは出てくる。答えは、

(a)

$$\nabla \cdot \mathbf{r} = 3$$

(b)

$$\nabla \cdot (\mathbf{a} \times \mathbf{r}) = 0$$

(c)

$$\nabla \cdot \{\mathbf{a} \times (\mathbf{r} \times \mathbf{a})\} = 2|\mathbf{a}|^2$$

となる。しかし、上の \mathbf{a} を成分表示した時 (b) と (c) の計算は面倒なのでやりたくないのが人情である。(b) に関しては、 $\mathbf{a} \times \mathbf{r}$ が \mathbf{r} と直交してるので、ベクトルを知っている人には、計算せずとも、ゼロであることが分かる。では (c) はどうするか。注意すべきは、 \mathbf{r} は 3次元等方的であるという事。また、ベクトルは座標には依存しない。そこで、例えば z 方向を定ベクトル \mathbf{a} の方向に選んでも一般性は失われない。そうすると、 $\mathbf{a} = a_z\mathbf{k}$ なので、(b) は、 $\mathbf{a} \times \mathbf{r} = a_zx\mathbf{j} - a_zy\mathbf{i}$ より、 $\nabla \cdot (\mathbf{a} \times \mathbf{r}) = 0$ となる。ほとんど暗算で解ける。(c) に関しては、 $\mathbf{a} \times (\mathbf{r} \times \mathbf{a}) = a_z\mathbf{k} \times (a_zy\mathbf{i} - a_zx\mathbf{j}) = a_z^2(y\mathbf{j} + x\mathbf{i})$ なので、 $\nabla \cdot \{\mathbf{a} \times (\mathbf{r} \times \mathbf{a})\} = 2a_z^2 = 2|\mathbf{a}|^2$ となる。なお、一般性を回復するために、 a_z^2 を $|\mathbf{a}|^2$ に戻すことを忘れてはいけない。

問2

行列の中に虚数単位があるが気にせず解けばよい。固有値を λ 、それに属する固有ベクトルを

$$\mathbf{R} = \begin{pmatrix} r_1 \\ r_2 \end{pmatrix}$$

と置こう。

$$\mathbf{A}\mathbf{R} = \lambda\mathbf{R}$$

を解くことにより、 $\lambda = \pm 1$ を得る。 $\lambda = 1$ に属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 1 \\ -i \end{pmatrix}$ となり、 $\lambda = -1$ に属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 1 \\ i \end{pmatrix}$ となる。固有ベクトルは定数倍しても解である。

問 3

- (a) 微分方程式である。微分方程式というのは、ある関数の階数の異なる微分が互いに打ち消し合っ
てゼロになるので、微分の階数が違ってても複数の項が同じ t 依存性を持つことになる。微分し
ても形が変わらない関数が指数関数である。したがって、定係数の微分方程式は指数関数型の
解 $x = Ae^{\lambda t}$ を持つ。これを代入すると $\lambda = -1$ なので、 $x = Ae^{-t}$ が方程式を満足することが
分かる。 $t = 0$ で $x = 1$ より、

$$x = e^{-t}$$

が解。もちろん、 $\frac{dx}{x} = -dt$ として、両辺を積分してもよい。

- (b) いろいろな解き方があるが、もっとも知識が要らない方法は、この式の両辺を 2 回微分すること
である。2 回微分すると、右辺はゼロになり、(a) と同じ式になる。

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{d^2x}{dt^2} \right) + \frac{d^2x}{dt^2} = 0,$$

したがって、

$$\frac{d^2x}{dt^2} = Ae^{-t}.$$

これを積分すると答えに辿り着く。もうひとつの方法は定数変化の方法である。同時方程式の
解を利用して、 $x(t) = C(t)e^{-t}$ と置く。これを与式に代入すると、

$$\frac{dC}{dt} = 2te^t$$

を得る。 $t = 0$ で $x = 0$ なので、 $C(0) = 0$ である事に注意し、これを $t = 0$ から t まで積分する。

$$C(t) = \int_0^t 2te^t dt = [2te^t]_0^t - \int_0^t 2e^t dt = 2te^t - 2e^t + 2$$

したがって、

$$x(t) = C(t)e^{-t} = 2t - 2 + 2e^{-t}$$

を得る。

問 4

- (a) $|z - 2| = |x - 2 + iy| = \sqrt{(x - 2)^2 + y^2}$ である。したがって、 $|z - 2| = 2$ は $(x, y) = (2, 0)$ を
中心とする半径 2 の円である。答えはその円の縁と内側という事。(図は省略)。

- (b)

$$\operatorname{Re}[z^2] = \operatorname{Re}[(x + iy)^2] = \operatorname{Re}[x^2 - y^2 + 2ixy] = x^2 - y^2$$

$x^2 - y^2 = 1$ は $(\pm 1, 0)$ を通過する双曲線である。したがって、 $\operatorname{Re}[z^2] \leq 1$ は双曲線の内側
 $x^2 \leq y^2 + 1$ の領域という事になる。(図は省略)。